

COVID-19に対するコミュニティソーシャルワークの展開



社会福祉法人名古屋市瑞穂区社会福祉協議会
事務局長 平坂 義則
(社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士)

コロナ禍で浮かび上がった新たな地域課題

福祉アクセシビリティの問題

制度・サービスからの孤立

高齢者の虚弱化の進行
認知機能の低下

相談や手続き
が苦手な人の
多さ

外国人住民
の生活実態

失業・減収した
人の増加（ギリ
ギリで生活）

住まいを失う
人の増加

コロナが怖いので
外出したくない

ミッシング
ワーカー

地域支えあいの
必要性

健康寿命の低下

県外家族の
規制自粛

セルフネグレクト

同居孤独死

地域交流行事
の休止

ヴァルネラビリティ

社会的孤立
の深刻化
ひきこもり等

長期自粛によ
る意欲低下

情報格差

発見の問題

子どもの家族
以外の交流

ストレスによ
るDV・虐待

活動者の
モチベーション低下

役員改選等で
活動が引継がれない

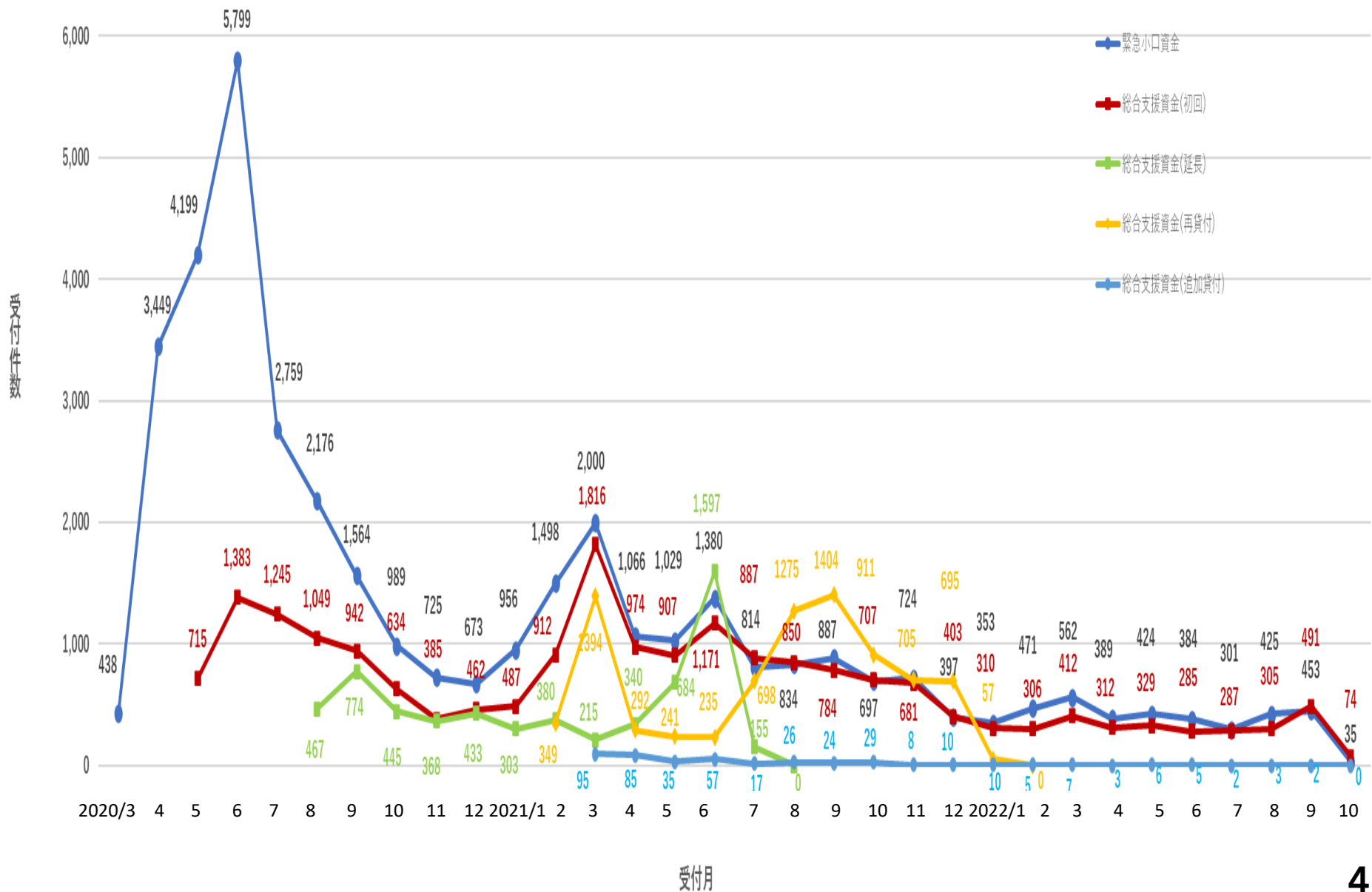
瑞穂区の状況

2022/4/1現在

事項	数値 ※()内は名古屋市の数値
人口	107,387人(2,317,985人)
65歳以上人口	28,523人(573,460人)
高齢化率	26.6%(25.1%)
ひとり暮らし高齢者	5,218人(107,934人)
高齢者のみ世帯(75歳以上)	1,430世帯(29,641世帯)
要介護等出現率	20.9%(20.1%)
身体障害者手帳所持者	3,561人
愛護手帳所持者数	790人
精神障害者所持者数	1,294人
①被保護世帯②被保護者数 ③保護率	①1,369世帯(38,428世帯)②1607人(46790世帯) ③1.49%(2.01%)
新型コロナ特例貸付申込件数・金額 (2020/3/25～2022/10/31)	2,516件(55,856件:7,194,733,000円)

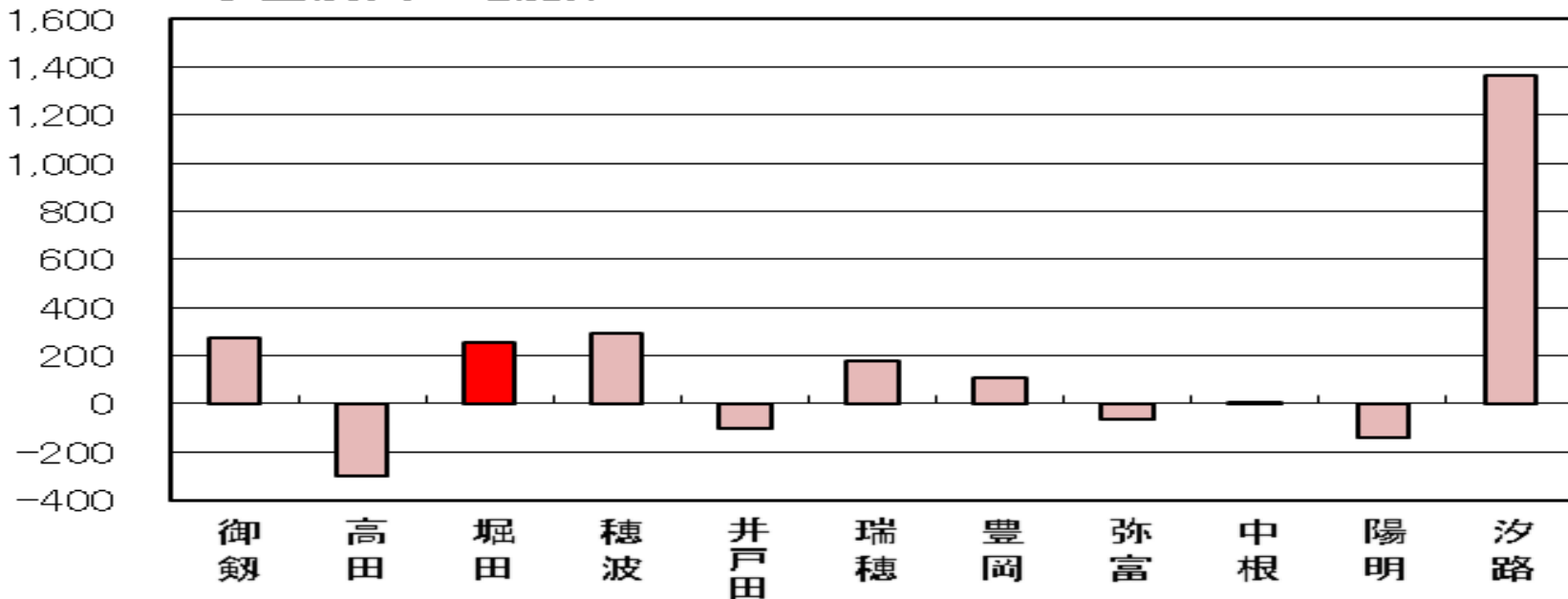
生活福祉資金 特例貸付区社協申込受付件数

生活福祉資金特例貸付 区社協申込受付件数 (月別)



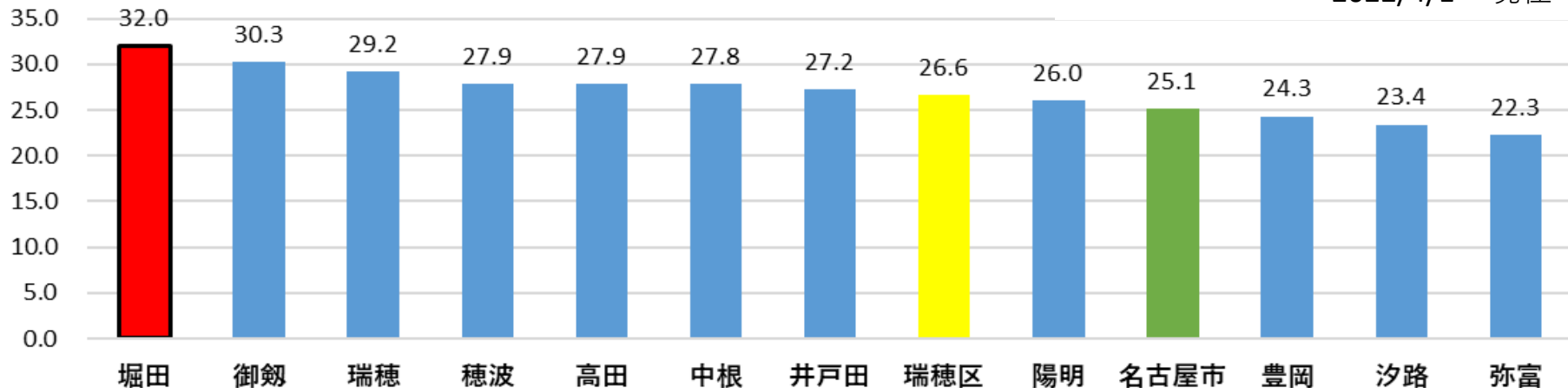
瑞穂区内の状況

増加数(人) 学区別人口増加数 (2021/10/1と2016/10/1の比較)



学区別高齢化率の比較

2022年度版瑞穂区福祉のあらまし
2022/4/1 現在



高齢者の孤独死（社会的孤立）の増加

■「高齢者の孤独死」の発生する背景、諸特徴の構造的な分析

○医学的側面：高齢による身体的機能が低下、家庭や社会における交流の希薄化、喪失体験
⇒肺炎や脳梗塞、心筋梗塞の発症リスクの増を否定できない

○社会的側面：社会参加への機会が少ない ・社会的接触の欠如⇒社会的役割からの孤立

○生活問題：貧困層の社会的孤立のリスクが高い ・高齢単身低所得世帯が孤立した状況に陥りやすい

※「高齢者の孤独死」はこれらの要因の結合によって起きる社会的孤立を本質としていると考える

■地域社会の特徴

○コロナ禍において「高齢者の孤独死」も都市部一帯で急速に増加

※瑞穂区社協把握分：10件、内1件は同居孤独死（2022年4月～2023年1月）

背景：「近隣社会からの孤立」、「家族関係の希薄化」、「局所的高齢化」、「集団や組織からの孤立

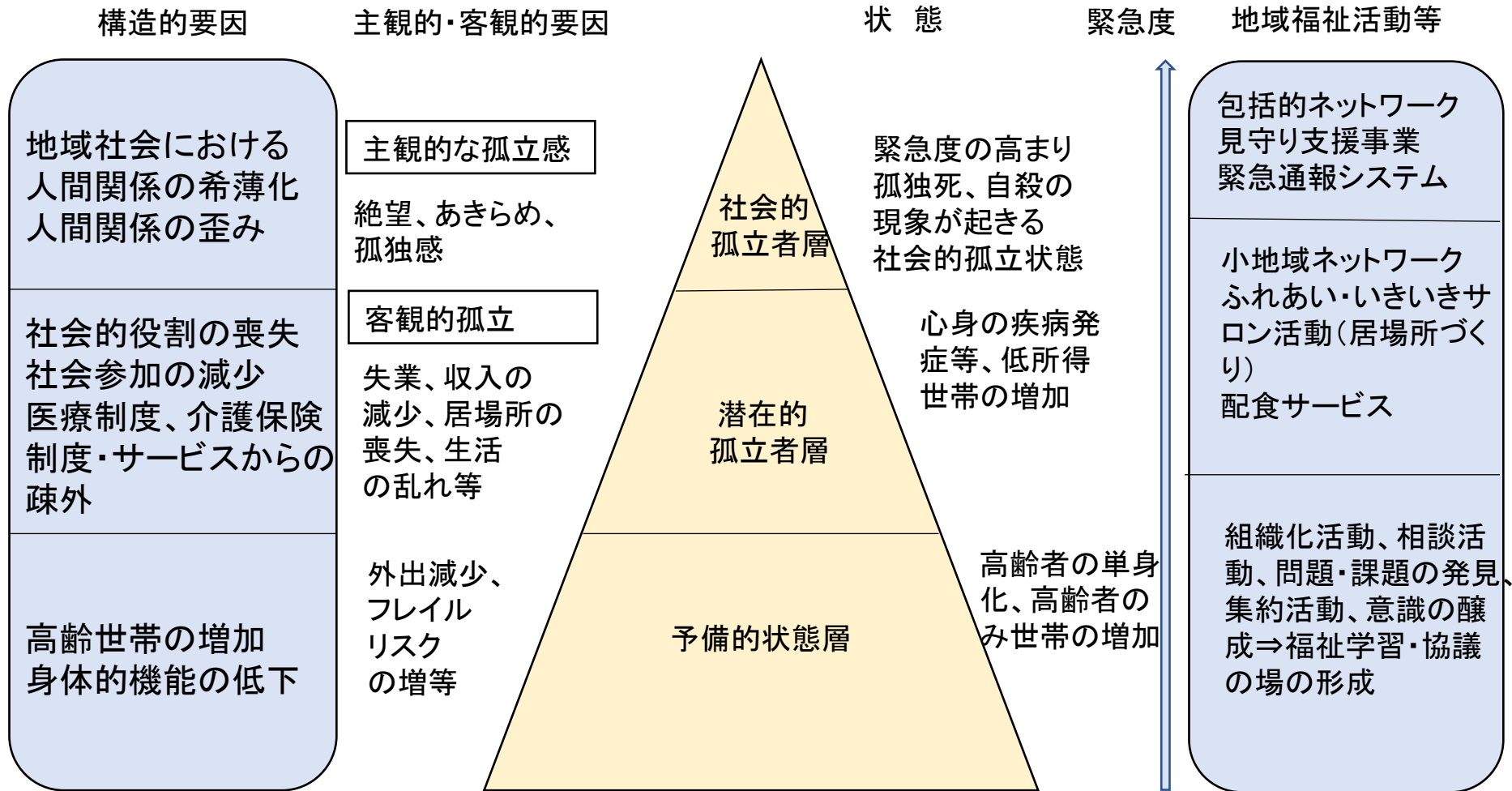
■「高齢者の孤独死」の防止について

○「小地域福祉ネットワーク事業」：ソーシャルサポートネットワークづくりを進めることで、孤独死の早期発見・把握と緊急対応はその効果が大きい

○配食サービスや新聞配達による高齢者の健康面の配慮と安否確認による防止機能、「ふれあい・いきいきサロン活動」の福祉教育機能についての有効性が認められ、予防的機能としても地域福祉活動が一定の役割を果たしている

○情報や制度・サービスの孤立化は、セルフネグレクトの状態に陥りやすく、ヴァルネラビリティを有しているなどの関連もあり、個人や地域のレジリエンスの強化に向けた支援が重要

社会的孤立と地域福祉活動の関係図



瑞穂区内の地域の「つながり」

弥富学区包括支援体制支援会議（試行）



生活支援活動



居場所づくり



生活支援の活動

買い物や移動支援（お出かけボラ）などに取り組む地域もある

ちょっとした「困りごと」を助ける生活支援の活動（地域支えあい事業6学区）

見守り活動

「気になる人」の見守り活動（ふれあいネット）

支えあいマップ作成（全学区）



居場所づくり

ふれあい・いきいきサロン、子ども食堂、対象を問わない居場所などの居場所づくり 110ヶ所

顔の見える関係

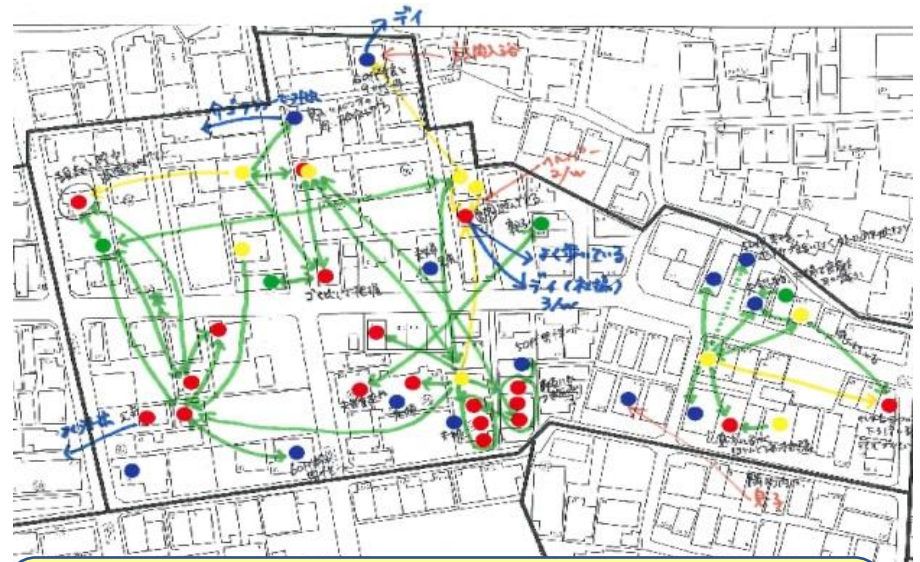
ふだんからのちょっとした気遣い

ふれあい給食（配食）9学区



地域支えあいマップ

町内会を範囲として、見守りなどの支援を必要とする方々などを地図に落とし込み、見守る人たちとのつながりを導線で結ぶことにより、地域における関係性や支え合いの状況を明らかにするもの



マップは毎年更新し、確認された情報、課題を共有し、ふれあいネットワーク活動（見守り活動）につなげている。

「8050等世帯」の相談の特徴（2017年4月～12月：32世帯）

1 親子の高年齢化

- 親が80代以上、子どもが50代以上の世帯：18世帯（56%）
- 親が60～70代以上、子どもが30～40代以上の世帯：14世帯（44%） ⇒ コロナ禍における同居孤独死の増加を懸念

2 長期ひきこもりの中高年の増加

- 子どもが介護離職等による未就労のため親の年金収入で生活
 - ・ 関係機関からの相談：17世帯（約53%）
 - ※ ミッシングワーカーの懸念
- 子どもがひきこもり生活、仕事に定着できない
 - ・ 親からの相談：9世帯（約28%）

3 親亡き後の問題

- 子どもが無年金高齢者になることへの危惧
- 収入が途絶え生活の行き詰まりへの不安



2018/6/2 放送 NHKテレビ
「NHKスペシャル ～ミッシングワーカー 働くことをあきらめて～」
※生活困窮者自立支援機関（仕事・暮らしサポートセンター金山の支援事例）



○ミッシングワーカーとは
親の介護などを理由に離職し、その後も仕事をすることを諦めてしまう。失業者とはハローワークなどで求職している人を指し、一方、働くことを諦め、求職活動さえできなくなる人は、統計に反映されず労働市場から消えた状態となる。こうした人たちを、労働経済学の専門家は「ミッシングワーカー(消えた労働者)」と呼んでいる。

いきづらさを抱えている



働きたいけど、働けない

居場所を見つけない

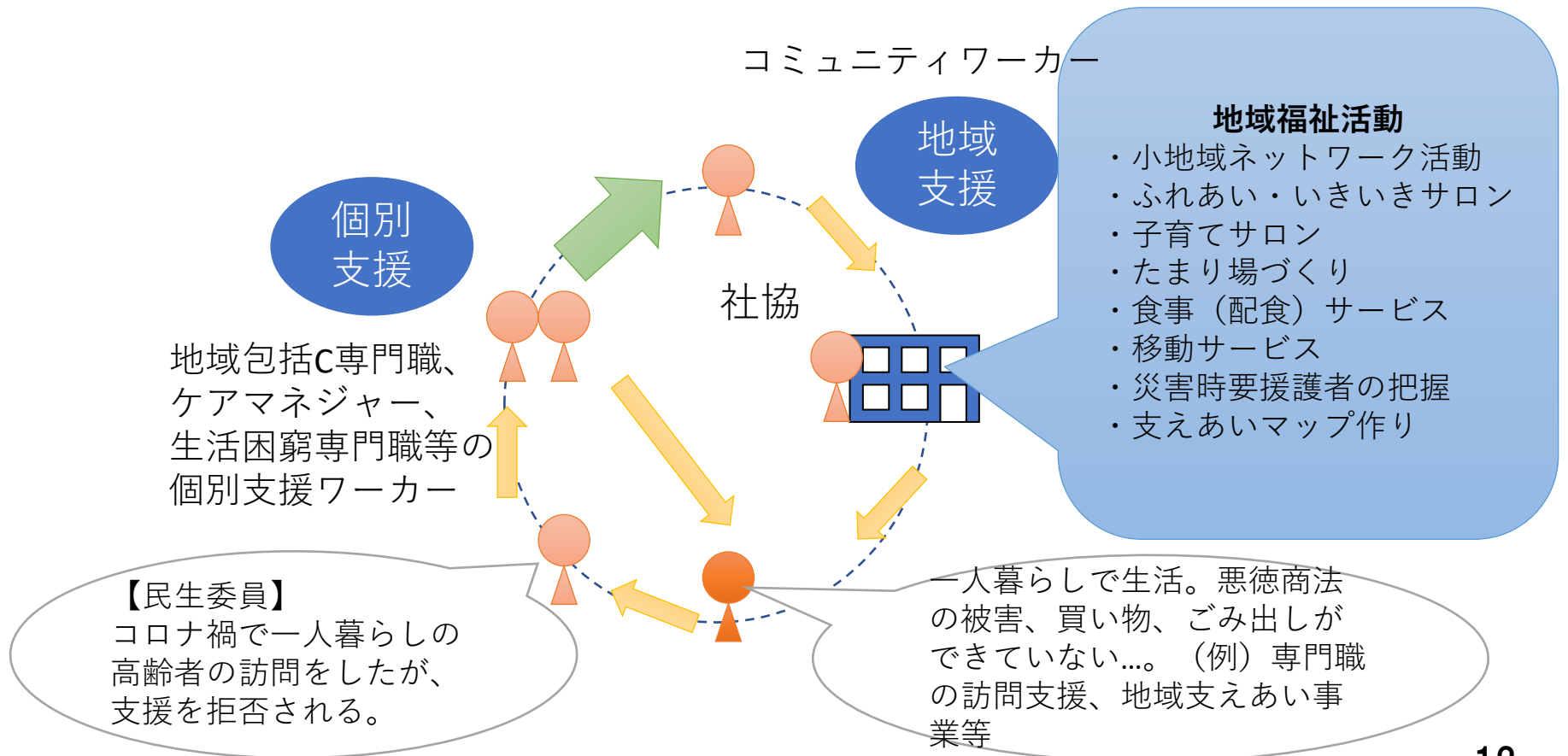
8050等世帯の課題

介護離職



個別支援から地域支援への展開に向けて

○一人のワーカーが両方の役割を果たすことが難しいとしたら、地域の中で個別支援から地域支援へのサイクルを回すためにどうしたらよいか、という課題認識がある。



出会い・学習・
共有・協議の場

Ex. 地域ケア会議・協議
体・支援会議などの場

インフォーマル
な社会資源開発

Ex. 住民主体のサービス

個別ケース

総合的な個別
ケース支援

持続可能な状態（サステナビリティ）に向けて



○地域共生社会と SDGs～『誰一人取り残さない』の意識化

「会えなくても、とぎれない、孤立しない(させない)ための地域でのつながりと支えあい」を進め、「思い」を「か・た・ち」にするための「新しいつながり方」の取り組みをしていきたい。

※「か」おを合わせる、「た」いせつな、「ち」いきのなかまとともに

○ベビー用品を取り扱う企業からベビー服などの寄贈から、区内の施設や児童館などへ配布を行い(市域に広げる)⇒医療機関、NPO、児童の施設や関係機関との幅広いネットワークづくりを進めることができた。現在、企業の社会貢献活動の連携を進めている。

※瑞穂区社協とブラザーとの包括連携協定を締結(2022年4月)

○地域共生社会の実現に向けた、相談支援(多機関協働)、参加支援、地域づくりに向けた支援では、地域の多様な社会資源との連携が重要となる。地域住民の「つながりたい」という思いを専門職(社協職員)がしっかりと受け止める。つながることを支援できる社協(専門機関)を目指したい。

○「のりしろ」「横糸・紡ぎあい」

=専門機関の専門職や地域住民(推進協等)や民生委員が協働し、地域社会ができることを出し合い、協働してできないことを埋めていきたい。

地域共生社会の実現に向けて組織的な連携を強化!

名古屋市瑞穂区社会福祉協議会と包括連携協定を締結

ブラザー工業株式会社(社長:佐々木一朗)の国内販売子会社であるブラザー販売株式会社(社長:三島剛)は、社会福祉法人 名古屋瑞穂区社会福祉協議会(会長:滝井慶之)と地域共生社会の実現に向けて包括連携協定を締結し、4月26日にブラザーニータムで締結式を行いました。



今後の課題

- 早期発見、早期対応による予防的支援の必要性、小地域の総合相談の仕組みづくりはアウトリーチを行う上でも重要
- 社会的孤立、排除のない地域づくりのために、**住民の主体性**を高めていくことも必要
- 岩間の「**一つの事例から地域を変える**」という「**地域を基盤としたソーシャルワーク**」を推進していくことが重要な視点となる

ソーシャルワーカーとして

□ **ソーシャルワークの視点を重視**

- 関係性への着目し、「個」に限定したアプローチするのみではなく、社会とつながったトータルな個へのアプローチを意識
- 年齢、場所、内容、分野を問わず生活全般の困難とニーズに寄り添い、支援内容と一緒に悩み、一緒に考える「伴走的支援」の必要性
- 優先順位 ①本人のできること、②身近な家族や支援者や専門家、支える人がいなければソーシャルワーカーが一時的、経過的サポート。ただし、本人の多様な生活を一つの機関、一人の専門職で支えられない
- 最終的に上記①、②を整える、ない資源は（人、サービス、仕組み）は「探す」、「つくる」
- 越境する地域福祉実践をしていく上で、自分たちの事業だけでなく、**地域福祉全体をとらえる視点を持って、お互いに協力し合い、地域を創っていくという視点を持つ**